花1000輪

潮見崎りょう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
花１０００輪

【Ｎコード】
Ｎ４２４６Ｔ

【作者名】
潮見崎りょう

【あらすじ】
１９歳の時に交通事故に遭い、死んでしまったさくら。
彼女は事故に遭った交差点で、自分の為に手向けられる花が１０００輪になっているのを待っている。
父親の転勤で引っ越してきた健一は、「幽霊が出る」という交差点に置いてあった花瓶に花を挿した。すると、健一には事故で死んださくらが見える様になる。

あたしの名前は高島さくら。
３年前、１９歳の時にこの横断歩道を歩いてる途中で信号無視の車に轢かれて死んだ。
それ以来、ずっとここにいる。本当は早く天国でも地獄でも行って、生まれ変わればいいんだけど、これはあたしの最期の意地。あたしは花屋になりたかった。だから、あたしの為に１０００輪の花が供えられるまではここにいる。
１０００輪なんてすぐに供えられると思ってた。でも３年もすれば、ここであった事なんて忘れられるものなんだね。街の人達やあたしの友達がそうだから。忘れなくてもここには来なくなっちゃうんだね。あたしを轢いた人やあたしの家族がそうだから。人の心は簡単に移ろうものなんだね。
たまにあたしを見付けてくれる人がいる。でも「花を1輪下さい」と言う前に去っていく。こんなに血だらけの姿じゃ去りたくなる気持ちも分かるけど。
３年経つのに、生々しい血の色。それなのにあたしは年をとらなくて、忘れられて、取り残されて。
後、１８６輪なの。誰かあたしに花を供えて。

小学校3年生の多奈川健一は、父親の仕事の都合で9月にこの街に引っ越してきた。
母親と新しい小学校に向かう通学路を歩いていた時、健一は横断歩道の信号の下に置かれている汚れた花瓶に挿してある枯れた花束に目を留めた。
「お母さん、この花束何？」
「そうね。きっと交通事故でもあったんじゃないかしら。健一も気

を付けなさいよ」
　9月の新学期から健一の新しい学校に通う日々が始まった。明るく人懐っこい健一には新しい友達がすぐにできて、学校生活を楽しく過ごしていた。それでもやはり健一はあの横断歩道の枯れた花束が気になっていた。

　1カ月が過ぎた頃、健一は同じクラスでよく一緒に帰る陽太郎と直樹に横断歩道の事を聞いてみる事にした。
「ここでさ、どんな事故があったか知ってる？」
「おれ、知らない」
「僕は知ってるよ。なんか女の人が車で轢かれたんだってさ。すっごい事故だったんだって。ママが言ってた」
「なんだよ。おまえ、母さんの事、ママって呼んでんの？だっせー」
「い、いいでじょ、別に。そんなのよりもここって女の人の幽霊が出るって噂があるんだよ」
「そうなの？どんな噂？」
　健一はその噂の内容に興味を持った。
「血だらけの女の人が『花をくれ』って言ってくるんだって」
「そうなんだ」
「今、誰もいねえじゃん」
「だから噂だってば」
　陽太郎と直樹の言い合いをよそに、健一はぽつりと言った。
「この花束、誰も換えてあげないのかな？」
「はあ？そんなの家族とかが換えるんだろ、普通」
「でも枯れてる」
「だったら健一が花換えれば？」
「止めなよ。女の人の幽霊が出てくるかもしれないよ」
「直樹、幽霊とか信じてんのかよ！ばかだなー」
「陽太郎君、うるさい。もう僕帰るから、じゃあね」

「おれもこっちだから。じゃあな」
「うん、じゃあね」
陽太郎と直樹と別れて家路に向かう健一は、さっきの噂を思い出していた。
女の人の幽霊が出る、か。怖いけど、もし僕があそこで死んで、枯れたままの花束を誰も換えてくれなかったら嫌だろうな。
健一は少し恐怖を感じながらも、道端に咲いていた花を1輪摘んであの横断歩道に引き返した。夕方になると、その横断歩道は人通りも車の通りも昼間に比べてずっと少なくなる。今は誰もいない。健一は花を持って、汚れた花瓶の前に10分以上立ち往生していた。

とりあえず、健一は近くの公園で汚れた花瓶を洗う事にした。枯れた花束は公園の花壇に置いた。
「ごみじゃないし、いつかはこの花壇の養分になるよね」
そんな独り言を呟いて、綺麗に洗った花瓶に水を注いで花を挿した。その公園から横断歩道に戻るのにまた10分程立ち往生した。
噂は怖かったが、健一は勇気を出して横断歩道に戻った。やはり、人も車も通ってなかったが、元あった場所に花瓶を置いた。

あたしに花を供えてくれたのは誰？花を供えられるのは久し振りだ。しかも花瓶も綺麗に洗ってくれてる。
あたしは花瓶を置いてくれた人を見た。……さっきここを通った小学生の男の子？すっごく驚いてる。あたしが見えるのかな。
「花、ありがとう」
あたしは試しに話しかけてみた。でも、男の子は目を大きく見開いて口を開けたまま固まってる。まあ、あたしの姿を見れば当り前か。
「きみにはあたしが見えてるんでしょ？」

男の子はすごい勢いで首を縦に振った。その様子に笑っちゃった。
「お、お姉さんが、う、噂の女の人の幽霊？」
「あたし、噂になってるの？」
「そ、そうだよ。『花をくれ』って言う女の人の幽霊が出るって」
そんな噂話になる様な存在になっちゃったんだ。そういえばさっきも友達とそんな話してたっけ。
「きみはその噂を確かめたくて、あたしに花を供えてくれたの？」
だったら、みんなでさっさと１０００輪の花を供えてくれればいいのに。
「違うよ」
あたしは男の子の少し強い口調に驚いた。
「あの、もし僕がここで死んで誰も枯れた花束を換えてくれなかったら嫌だなって思って、それで１輪でもいいから花を換えようと思ったんだ。だから噂とかは関係ないよ。お姉さんが出てきた時にはびっくりしたけど。僕、幽霊なんて見た事なかったし」
男の子の必死さが伝わってきた。そっか、純粋に花を供えようとしてくれたんだ。
「お姉さんはどうしてここにいるの？」
「３年前に交通事故で死んだの」
「でも、死んだ人って天国とか、そういうところに行くんじゃないの？」
「あたしはね、待ってるの」
「何を待ってるの？」
目を輝かせちゃって。好奇心旺盛な子だなあ。あたしもこのくらいの頃はこんな感じだったのかな。
「あたしの為に花が１０００輪供えられるのを待ってるの」
「どうして？」
「あたし、花屋になりたかったから」
「そうなんだ……。死んじゃったら花屋さんにはなれないよね……」

男の子は真剣にあたしの話を聞いてる様だった。どうしてだろう。この子、あたしが怖くないのかな？
「ねえ、きみはあたしが怖くないの？あたし、こんなに血だらけなのに」
「初めはちょっとだけ怖かったけど、今はもう平気だよ！だって、お姉さん、僕が花瓶を置いて出てきた時にすごく嬉しそうだったから」
男の子はあどけない笑顔で言った。きっと、人懐っこい子なんだろうな。
「僕、多奈川健一って名前なんだ。お父さんがね、一番健康になれます様にって意味でこの名前にしたんだって。小学校３年生だよ。お姉さんの名前は？」
「あたしは高島さくら」
「さくらお姉さんかー。きっと、桜みたいに綺麗な人になります様にって意味でその名前にしてくれたんだろうね」
不思議な子。幽霊を目の前にして、こんなに話せるものなの？
「あ、僕、そろそろ帰るね。お母さんが待ってるから」
「うん。健一君、花、本当にありがとう。嬉しかったよ」
健一君は少し何かを考え込む様な仕草をした。
「さくらお姉さん、１０００輪まで後どれくらいなの？」
「え、今、健一君がくれたから、後、１８５輪だけど……」
「だったら、後の１８５輪も僕が持ってきてあげる！じゃあね、さくらお姉さん！」
健一君は走って帰って行った。子どものただの気紛れかもしれないけど、その言葉が嬉しい。だって、今まであたしとまともに話してくれる人なんかいなかったから。
あたしは自分が少し涙ぐんでる事に気付いた。

健一は興奮していた。まさかあの噂が本当だったとは思わなかったし、自分に幽霊が見えるとも思わなかったからだ。
でもなんでさくらお姉さんだけ見えたんだろう。ずっとあの枯れた花束を気にしていたからかな。血だらけのさくらお姉さんには驚いたけど、さくらお姉さんの「花屋になりたかった」という話を聞いたら花を集めたくなった。だって、あんなところに1人でいるなんて寂しすぎるよ。
「ただいまー」
「健一、遅かったじゃない」
母親が声をかけてきた。
「ごめん。お母さん、今日ね、僕――」
健一はさっきの事を言おうと思ったが止めた。
「今日、何かあったの？」
母親は健一が途中で話すのを止めた事を不思議がっている様だった。
「今日の放課後ね、僕、サッカーで2点も点を入れたんだよ」
「それならいいけど。最近、暗くなるのが早いから気を付けなさいよ」
嘘は言っていない。だが、健一はさくらの事を家族に話すつもりはなかった。家族は事故の事を知らない訳だし、何より家族に秘密を持てた事が嬉しかったのだ。
「陽太郎と直樹には話そうかな」
夕食と風呂を済ませてベッドに横になった健一は2人にさくらの事を話そうか迷った。といっても、綺麗に洗われた花瓶とそこに挿してある花を見たら、2人は自分がやったと気付くかもしれない。健一は2人がその事に気付いたら、さくらの事を話そうと決めた。
「今日、さくらお姉さんに会った事が夢じゃないといいな」
翌朝、健一は朝食があまり食べられなかった。両親と妹は心配していたが、病気ではない。緊張していたのだ。登校する時にあの横

断歩道にさくらが見えるのか、陽太郎と直樹は気付くのかが気になっていたからだ。
あの横断歩道に近付くと更に緊張が増した。だが、その緊張はすぐに解れた。さくらは横断歩道の向かい側にいた。しかも、健一があげた花を嬉しそうに眺めていた。健一は車に注意して小走りに横断歩道を渡った。
「さくらお姉さん、おはよう」
健一は小声でさくらの背中に挨拶した。さくらは驚いた様子で振り返ったが、健一を見るとにっこりと笑った。血だらけの顔なのに、その笑顔はとても綺麗で健一はどぎまぎした。
「おはよう、健一君」
「あ、あのさ、今日も花を摘んでくるから」
健一は恥ずかしくなって、その場から急いで学校へと向かった。

教室に入ると陽太郎と直樹が駆け寄ってきた。
「おはよう、健一。あの横断歩道の花見たかよ」
「花瓶が綺麗に洗ってあって花も1本入ってたんだよ！」
「う、うん。見たけど」
「誰がやったんだろうなー。気味悪いよ」
「なんだ、陽太郎君、昨日は『幽霊とか信じてんのかよ』とか言っといて。自分も信じてるんでしょ」
「違えよ。おれは今更あんなところに花を置く奴が気味悪いって言ってんだよ！」
「ねえ、健一君は誰がやったんだと思う？怖くなかったのかな？」
「やっぱり誰かも気になってたんじゃないかな？やっぱり枯れた花束を置いておくのが可哀想だと思って」
健一は直樹の質問にどう答えるか考えたが、陽太郎の言葉を聞いて、自分がやったと答えるのを止めた。健一は陽太郎の言葉に傷付いていた。自分がしている事が2人には不気味に思われている事に。それでも健一の意思は変わらなかった。

健一君がくれた花――この花の名前何だっけ？……思い出せない。花屋になるのが夢で、あんなに花の事を勉強したのに。
３年で変わったのは周りだけじゃない。あたしも変わっちゃった。というか、色んな事を忘れてきてる。ここを通る知り合いの名前も友達の名前ですらも……。
怖い。忘れられる事も忘れる事も。早く天国でも地獄でも行きたい。でも、健一君が本当に花を供えてくれるならここに留まりたい。

今日もダメだった。中学生っぽい子と目が合ったけど、その瞬間に逃げられちゃった。あたしだって好きでこんなところにいる訳じゃない。ただ花を１０００輪供えて欲しいだけなの。それは過ぎた願いなの？生きていた時に叶えようとした夢をこんな形でも実現したいと思うのは間違いなの？

「さくらお姉さん」
健一君の声。今日も来てくれたんだ。ほっとする。昨日会ったばっかりなのに。
「花、探したんだけど、今の時期ってあんまり咲いてなくて。これくらいしか見付けられなかった」
あたしは茫然とした。昨日と同じ花なのに、やっぱり名前が思い出せない。
「あ、ごめんね。白粉花なんてダメだよね」
健一君はあたしが黙ってる事が気になっていたみたいだった。そうだ、これは白粉花だったっけ。
「違うの。ちょっとぼっとしてた。花、ありがとう。どんな花でも嬉しいよ」
「良かったー。僕のお小遣いじゃ、立派な花が買えなくて。しばらくは白粉花ばっかりになっちゃうかも。でも、白粉花でも１輪に入

るのかな？」
「あたしが１輪って認めれば１輪だよ」
「じゃあ、今日は２０輪だ。後、１６５輪だね」
２人で少し笑って、沈黙ができた。
「さくらお姉さん、ちょっと聞いてもいい？」
健一君の表情が真剣になった。
「さくらお姉さんの家族とか友達は、なんでさくらお姉さんに花をあげないの？」
唐突な質問に苦い思い出が蘇る。
「あたしの家族は１年前にこの街から引っ越したの。父さんが言った。『お前が亡くなったこの街で暮らしていくのはもう辛すぎる』って」
父さんも母さんも姉さんも、泣きながら最後の花束を供えて行った。
「あたし、言ったんだけどね。『気持ちは分かるけど、あたしはまだここにいるの。せめて花が１０００輪供えられるまではいてよ』って。でも、あたしの声は家族には届かなかった。家族にも声が届かなかったくらいだもん。友達だったら尚更だよね。あたしが見える子もいたけど、やっぱり怖がってここを通らなくなっちゃった」
ふと横を見ると、健一君が泣いてた。
「なんで健一君が泣いてるの？」
「だって僕、酷い事聞いたから」
「そんな事ないよ。あたしも誰かに聞いて欲しかったの」
そう、聞いて欲しかった。あの時の事を、あたしの思いを。
「でも、なんで僕にさくらお姉さんが見えたんだろう。僕、昨日言った通り、今まで幽霊なんて見た事なかったのに」
健一君の声はまだ涙声だ。
「うーん。なんでかな。昨日、健一君言ってたでしょ。『もし僕がここで死んで誰も枯れた花束を換えてくれなかったら嫌だ』って。どうして、そう思ったのかな？」

あたしは努めて明るく聞いてみた。
「だって、忘れられちゃったみたいで悲しいし、寂しいから」
「……だからだよ」
「え？」
だから、健一君にはあたしが見えたんだ。
「あたしも、この1年、みんなから忘れられちゃったみたいで悲しかったし、寂しかったから。そんなあたしの思いを分かってくれた健一君だから、あたしが見えたんだよ」
健一君は、あたしの思いに寄り添う様な考え方ができる子なんだ。

それから毎日、健一はさくらと会った。登校する時にはさくらに小声で挨拶し、下校する時には道端や公園で花を摘んだり、時には自分の小遣いを貯めて花束を買ったりしてさくらに花を届け、さくらとその日の出来事や他愛のない話をして過ごした。花を見付けられなかった時も、さくらは健一が来るのを楽しみにしてくれている様だった。

11月に入ったある朝、教室に入ると青い顔をした陽太郎と直樹がすぐに駆け寄ってきた。
「おはよう。2人共どうしたの？」
「どうしたのじゃないよ、健一君！」
「健一、ちょっとこっち来い」
健一は訳が分からないまま、陽太郎に腕を引っ張られ、直樹と共にあまり人が来ない階段の踊り場まで連れて来られた。
「どうしたの、こんなところに連れてきて」
「健一君、僕、昨日の塾の帰りに見ちゃったんだ。健一君があの横断歩道で1人で僕には見えない誰かと話してるところ」
「お前だったのかよ。あそこの花ずっと換えてた奴」

「そうだよ」
「なんでおれ達に黙ってたんだよ」
「なんでって、1番最初に花を換えた時に、陽太郎が『今更あんなところに花を置く奴が気味悪い』って言ってたから。なんとなく言えなかったんだ」
「ばか！健一がやったって言ってくれてりゃ、そんな事言わなかったよ」
「そうだよ、健一君。僕達、友達でしょ？『花、一緒に集めよう』って言ってくれれば良かったのに」
　健一はこの2人と友達になれて良かったと思った。そして、2人にこれまでの事を話す事に決めた。

「じゃあ、そのさくらお姉さんって人はあの横断歩道で花を１０００輪もらえるのを待ってるって事だな」
「でも、僕と陽太郎君にもその人が見えるかな？」
「さくらお姉さんが言ってた。『みんなから忘れられちゃったみたいで悲しかったし、寂しかった』って。僕がその思いを分かったから見えたんだって。だから2人が本当にさくらお姉さんの事を思って花をあげたら見えると思う」
「じゃあ、今日の放課後、3人で花を集めようぜ。健一、１０００輪まで後何輪なんだよ？」
「後、９７輪」
「3人で集めればすぐに集まるよ。僕もお小遣い貯めて花を買うから」

　その日の放課後、健一達は花を探したが、１１月になるとなかなか咲いている花が見つからず、結局3人で小遣いを出し合って花を４輪買った。
「じゃあ、先に僕が花瓶を取ってくるから2人はここで待ってて」
　健一は2人を公園に待たせて横断歩道に向かった。

横断歩道にはさくらが立っていた。
「健一君、今日は早いんだね」
「うん。あのね、さくらお姉さん、僕の友達もさくらお姉さんに花をあげたいっていって言ってるんだけど、友達にもさくらお姉さんを見る事できるかな？」
さくらは少し難しそうな顔をした。
「分かんない。あたしの為にって本当に思ってくれてるなら、健一君みたいに見えると思う」
「じゃあ、絶対に大丈夫！今、花を換えて友達を連れてくるから待っててね」
健一は花瓶を持つと走って公園に戻った。
「さくらお姉さん、何か言ってたか？」
陽太郎が不安そうに聞いてきた。
「やっぱり、自分の為に花をくれるなら見えると思うって」
「僕だけ見えなかったらどうしよう？」
直樹も不安そうだった。
「2人共さくらお姉さんの為にお小遣いで花を買ってくれたじゃん。大丈夫だよ。あ、でも、さくらお姉さん、事故の時のままの姿で血だらけだけど優しい人だから、あんまり怖がらないでね」
健一達は横断歩道に向かって歩き始めた。
「もう健一には見えてんの？」
陽太郎が恐る恐る聞いてきた。
「うん、こっち見てる」
「どんな顔してるの？」
直樹は半分泣きそうになっている様だった。
「さくらお姉さんも少し不安そうな顔してる」
そして、とうとう横断歩道に着いた。
「その2人が健一君の友達？」
「そうだよ。今から3人で花瓶を置くから。2人共花瓶持って」
陽太郎と直樹が健一の持っている花瓶に手を添えた。

「それじゃ、置くよ」
健一達は花瓶をそっと置いた。
「わぁっ！」
陽太郎と直樹が同時に声を上げた。
「2人共、さくらお姉さんが見えたんだね！」
「み、見えてる」
「ぼ、僕も」
健一はさくらを見た。さくらも2人が見えて驚いている様だった。
「あたしにも2人が見える。2人共、あたしの為にって思ってくれたんだね。この花も3人でお小遣いで買ってくれたの？」
「そうだよ！おれ達で買ったんだ。おれ、木下陽太郎って名前だよ」
「僕は佐々岡直樹です」
「陽太郎君と直樹君ね。あたしは高島さくら。よろしくね」
さくらと2人の笑顔を見て、健一はほっとした。
「さくらお姉さん、これからは僕と陽太郎と直樹で花をあげるからね。後、93輪だ！」

その日以来、健一君と陽太郎君と直樹君は、登校する時にはここで「おはよう」と言ってくれる様になった。傍目に見れば3人がお互いに挨拶している様に見えるかもしれないけど、それはあたしにも向けられた「おはよう」でもあった。
下校する時には人や車が通るのが少なくなってから、話をするのが習慣になった。
「俺、さくらお姉さんに花をあげるまでは漫画買わないで小遣い貯める！」
陽太郎君は言葉遣いは少し乱暴だけど、とても元気な子。
「もしも、健一君と陽太郎君がいない時でも、さくらお姉さんに挨

拶してもいいですか？」
　直樹君は内気みたいだけど、礼儀正しい子。あたしはもちろんいいよと言った。
　この３人ってすごくバランスがいいなあ。話してるとすごく楽しい。あたしが小学生の時はどうだっただろう。たくさん思い出があったはずなのに、やっぱり思い出せない。そう思うと悲しけど、今は花が１０００輪供えられるのを待ちながら、３人から色んな思い出をたくさんもらおう。天国か地獄に行った時にも忘れられないくらいに。

　ある日、陽太郎君が聞いてきた。
「さくらお姉さんって彼氏いなかったの？」
「陽太郎、止めろよ！」
　その質問に激しく反応したのは健一君だった。ここにあたしの家族や友達が来ない事を知ってるからだ。
「どうしてだよ、健一？だって、さくらお姉さん美人だもん。彼氏ぐらいいたっておかしくないじゃん」
「でも、陽太郎君、そういう質問って失礼だと思うよ」
　直樹君もおろおろしてる。
「３人共、待って」
　あたしは家族も友達もここには来ない事と彼氏にも新しい恋人がいる事を話した。話し終わると陽太郎君と直樹君は俯いて、健一君は陽太郎君を睨んでいた。
「さくらお姉さん、ごめん」
　陽太郎君が静かに謝った。直樹君も目に涙を浮かべてた。健一君は陽太郎君が謝った事で少し落ち着いたみたいだった。
　あたしはもう１つの事を人に話そうと思った。
「３人にもう１つ聞いて欲しい事があるの」
　３人はゆっくりと顔を上げた。
「あたし、死んでから、生きてた時の記憶がどんどん思い出せなく

なってきてる。友達の名前も、好きだった花の名前もね。あたしはそれが怖い、忘れられる事も忘れる事も。だから、3人にはあたしの事を覚えてて欲しい。そして花を１０００輪供えてくれるまで、楽しい話も人には言えない悩みだったり辛い事だったり、たくさん話をして欲しいの」

３人は顔を見合わせた。かと思うと途端に笑顔になって、健一君が言った。

「僕達、これからも色んな話するよ！」

陽太郎君も笑顔で言う。

「おれはテストで悪い点取って、母さんに怒られたらさくらお姉さんに慰めてもらう！」

直樹君は少し照れながら言う。

「秘密にして欲しい事はこの2人には言わないでね。特に陽太郎君には」

「直樹、なんだよ、その一言は」

「だって陽太郎、口軽いもんねー」

「健一まで酷(ひど)え」

３人の笑顔を見て、あたしは心から思った。

「３人共、本当にありがとう」

健一は陽太郎と直樹とさくらを見る様になって以来、家事の手伝いをする様になった。皿洗いや父親の靴磨き等をして、小遣いを貰う様にした。この時期に咲いている花を見付ける事が難しくなり、少しでも小遣いを多く貯めて花を買う事にしたのだ。健一の両親は息子の急な提案に驚いた様だったが、息子が好奇心旺盛である事を知っていたので喜んで受け入れた。

後、２３輪かあ。やっぱり3人で集めると早いなあ。健一は皿を洗いながら思った。でも、もしも１０００輪花をあげたら、本当に

さくらお姉さんはいなくなるのかな。
そう思うと健一は居ても立ってもいられなくなり、皿を途中で洗うのを止め、上着も着ず、母親が呼び止めるのを聞かず、横断歩道に向かって走った。
「健一君、どうしたの？」
さくらは驚いた様だったが、相変わらず優しい笑顔を健一に向けた。
「さくらお姉さんに聞きたい事があるんだ。さくらお姉さんは花を１０００輪あげたら、本当にここからいなくなっちゃうの？」
「うん」
「どうしても？」
「うん」
「１０００輪あげなかったら、ここにいてくれるの？」
「健一君、どうしてそんな事聞くの？」
健一は強く拳を握った。
「僕、ずっとこうやってさくらお姉さんと話してたい。ずっとさくらお姉さんにいて欲しい」
さくらは戸惑っている様だったが、それでも健一は言わずにいられなかった。
「分かってるよ。僕達とさくらお姉さんは住む場所が違うって事。でも、僕は一緒にいたいんだ」
「健一君……」
さくらお姉さんが僕の名前を呼ぶ。その声も花を１０００輪あげたら聞けなくなるの？
「僕、さくらお姉さんが見えなかったら良かった。そしたら、こんなに悲しくならなかったんだ！」
健一はそう叫んで、公園に向かった。泣いたまま、家に帰れなかったからだ。公園のブランコに乗って涙を拭く。そして顔を上げた時に目に入ってきたのは、その花の蕾だった。
「僕、さくらお姉さんに酷い事言っちゃった」

また健一は泣いた。一しきり泣いて、家に帰る時、健一は寂しそうな顔をしたさくらを見た。その姿を見るのが辛くて、健一は横断歩道に来た時の様に走って家に帰った。

「健一、途中でどうしたの？」
母親が声をかけてきた。
「なんでもないよ。お皿洗うから」
「目が赤いじゃない。泣いてたの？」
「……なんでもないってば！」
その声も涙声だったが、息子の強い声にそれ以上の詮索を止めて、息子が皿を洗う後ろ姿をそっと見守った。健一もその視線を感じ、少し安心した。
「お皿洗い終わったよ」
「うん。それじゃ、お小遣いあげるね」
母親は健一の頭を優しく撫でた。
「ありがとう、お母さん」
健一は貰った小遣いを握り締めて部屋に戻ってベッドに横になった。さくらお姉さんの為に早く花を１０００輪あげたい、でも１０００輪あげればさくらお姉さんはあの横断歩道からいなくなる。矛盾する自分の気持ちとさくらに酷い事を言ってしまった後悔と、母親の優しさにまた泣いて、そのまま眠った。

健一君、泣いてた。あたしが見えたせいで泣かせたんだ。そんな事、思ってもみなかった。あたしが見えた事で誰かを悲しませるなんて。
例えば、健一君があたしを見る事なく花を供えてくれたら、健一君に悲しい思いをさせずに済んだのかもしれない。でも、あたしの話を聞いてくれて、あたしに色んな話をしてくれる健一君がいてくれる事が嬉しかった。

「僕、ずっとこうやってさくらお姉さんと話してたい。ずっとさくらお姉さんにいて欲しい」
健一君の言葉は嬉しい。でも、健一君もあたしもそれが無理なのを知ってる。
「僕、さくらお姉さんが見えなかったら良かった。そしたら、こんなに悲しくならなかったんだ！」
健一君の泣き顔が言葉と共に鮮明になる。ごめんね、健一君。

翌朝、陽太郎君と直樹君はいつもの様に横断歩道に集まって挨拶してくれた。健一君はなかなか来ない。
「あいつ、寝坊でもしてんのかよ？」
「そろそろ学校に行かないと、僕達、遅刻しちゃうよ」
「２人共、学校に行っていいよ。多分、健一君はもう学校に行ってると思うから」
あたしの言葉に２人共、疑問を持った様だったけど、逡巡して学校に向かっていった。
「帰りには健一も連れてくるから」
陽太郎君はそう言って学校へと向かって行った。
「健一君、どうしたのかな？」
直樹君は陽太郎君に話しかけて、その後を追って学校に向かって行った。
健一君はもう来てくれないかもしれない。でも、それは仕方がない事なのかも。あたしは自分の事ばっかり考えてたんだ。最期の意地で１０００輪の花が供えられるのを待って、あたしを置き去りにした家族や友達を憎んで、あたしが見えているのを無視する人達を憎んで。

でもね、自分勝手なんだろうけど、健一君と陽太郎君と直樹君があたしを見てくれて、３人が色んな話をしてくれてる事は嬉しいんだよ。本当だよ。

健一は今日登校する時に、わざとあの横断歩道を避ける通学路で学校に来ていた。
放課後、３人はあまり人が来ない階段の踊り場に集まっていた。
「健一、今日の朝、どうして横断歩道に来なかったんだよ。ずっと待ってたんだぜ」
「さくらお姉さんも心配そうな顔をしてたよ」
「……僕、もうさくらお姉さんのところに行きたくない」
「何言ってんだよ。お前が最初に『さくらお姉さんに花をあげたい』って言ったんだろ？」
「だって、花を１０００輪あげたら、もうさくらお姉さんに会えなくなるんだもん」
「じゃあ、健一君はあの横断歩道にさくらお姉さんを１人ぼっちにさせとくの？」
「僕もどうしたらいいか分かんないんだよ！さくらお姉さんには花を１０００輪あげたいけど、そうするとさくらお姉さんに会えなくなっちゃう。僕、寂しいんだよ」
陽太郎が健一の胸ぐらを掴んだ。
「お前、１人だけ寂しいと思ってんのかよ？おれだって寂しいよ。けど、３年もあそこにいたさくらお姉さんの事も考えてみろよ。ずーっとあそこで１人で待ってたんだぞ」
健一は陽太郎の声が震えている事に気付いた。
「そうだよ、健一君。さくらお姉さんはもしかしたら誰も花をあげなくて、ずっとあの横断歩道に立ってなきゃいけなかったのかもしれなかったけど、健一君が気付いてあげて、僕と陽太郎君も気付く事ができて……。僕、上手く言えないけど、さくらお姉さんに花をあげられるのは僕達しかいないんだよ？僕だって寂しいけど、さくらお姉さんをちゃんと見送ってあげなくちゃ」
直樹は泣きながら言っている。それを見て、健一も泣きそうにな

った。
「僕、もう嫌だ。花は2人で集めてよ！」
健一は陽太郎の手を振り払って、階段を駆け降りた。
「それじゃ、おれ達だけでさくらお姉さんに花あげるからな！後悔したって知らねえぞ！」
「健一君、考え直してよ！一緒に花あげようよ！」
2人の叫び声が痛い程、健一の耳に響く。それでも健一は階段を駆け降りる事を止めなかった。
そして公園に向かって、その木を見た。その木の花の蕾はもう少しで開きそうになっていた。

それから、陽太郎君と直樹君は毎日来てくれるけど、健一君はここに来なくなった。
2人共、明るく話そうとしてくれてるけど、表情を見れば無理に明るくしてる事は一目瞭然だった。あたしも2人の話を聞いて明るくする様に努めてみた。でも、やっぱり難しかった。

「健一の奴、あんなに頑固だと思わなかった」
陽太郎君が苛立った口調で言った。
「健一君、最近、僕達と全然話してくれないんだ」
直樹君はしょんぼりしてるみたいだった。
「クラスのみんなとも話さないの？」
「ううん、僕達とだけ」
「しかも、授業が終わるとすぐ家に帰っちゃんだよ？あいつ、何やってんだろ」
「さくらお姉さん、僕達、また仲良くできるかな？」
「きっとできるよ。あたしのせいで、3人に迷惑かけちゃってごめんね」
「さくらお姉さんのせいじゃねえよ。健一が悪いんだよ。自分でさ

くらお姉さんに花あげたいって言ってたのにさ！」
「でも、僕達だけでも花は集めるね。後、１２輪だから」
「２人共、ありがとう。でも、健一君の事、あんまり責めないであげてね」

後、１２輪。陽太郎君と直樹君だけで集めてくれても、あたしはここから去るつもりだ。でも、最後は３人に見送って欲しいな。

健一はあの横断歩道を通る事は避けていたが、家事の手伝いは続けていた。どうしても買いたいものがあったからだ。そして、公園にあるその木の蕾の観察も忘れなかった。なんでこんな時期に花が咲くんだろう？
さくらに会わなくなり、陽太郎と直樹と話をしなくなって２週間が過ぎていた。さくらお姉さん、怒ってるかな？陽太郎と直樹は花をもう１０００輪あげたのかな？２人の様子を見る限りでは、まだ１０００輪は集まっていない様だった。

１２月に入った。いつもの様にさくらがいる横断歩道を避けて、登校する途中で公園に寄った。健一は、その花が咲いているのを見た。１０００輪目はやっぱりこの花じゃないと。花が涙で霞む。陽太郎と直樹と、それからさくらお姉さんとも仲直りしなきゃ。健一は学校に急いだ。
「陽太郎！直樹！」
クラスに入るなり、名前を呼んできた健一に２人は驚いていた。
「今更、なんだよ」
陽太郎はまだ怒っている様子だ。
「いいから、２人共、ちょっと来て！」
健一は陽太郎と直樹をあの階段の踊り場まで引っ張った。
「健一君、どうしたの？」

直樹は期待している様子だった。
「陽太郎、直樹、この前はごめん」
健一は素直に頭を下げて謝った。陽太郎が健一の頭をばしっと叩いた。健一は顔を上げた。
「最初から、そう言やいいんだよ。ばか」
陽太郎はそっぽを向いているが、嬉しそうな顔をしていた。
「健一君、また一緒に花を集めてくれるんでしょ？」
直樹は声を上げて喜んでいた。
「で、呼び出した理由はなんだよ？」
「１０００輪まで、後、何輪？」
「後、３輪だよ」
「今日、陽太郎君とその３輪を買いに行こうと思って、僕達も健一君と仲直りしたかったんだ。ね、陽太郎君」
「直樹、うるせえぞ！」
陽太郎の顔が真っ赤になっていた。健一は笑った。つられて陽太郎と直樹も笑う。３人はあっさりと仲直りできた。
「それでその３輪なんだけど、２人共、あの公園のあの木知ってる？」
陽太郎と直樹は思い出した様に言った。
「そっか、さくらお姉さんにあげるのはあれしかないか！」
「うん、さくらお姉さん、絶対に喜んでくれるよ」
「放課後、あの花を摘んで行こう。でも、僕、先にさくらお姉さんに謝らないといけないんだ。僕、酷い事言っちゃったから」
「それじゃ、おれ達がいつも通りに花瓶の水を取り換えに行くから、それまでにお前はさくらお姉さんと仲直りしとけよ。あーあ、おれって、超いい奴！」
「自分で言わなかったら、かっこいいのに」
「本当、陽太郎っていい奴なんだけどね」
「なんだよ、２人して」
健一はこの２人と生涯ずっと友達でいたいと思った。笑いながら

も、鼻の奥が少しつんとした。

健一達は放課後になって、公園で打ち合わせをした。先に陽太郎と直樹が花瓶の花を換えに、正確には花を摘みに来る。その間に健一はさくらに謝る。健一とさくらが仲直りしたところで、陽太郎と直樹が花を持って来る。健一は陽太郎と直樹に花だけを持って来る様に念を押した。絶対に枝を折っちゃダメだからね。

陽太郎と直樹が花瓶を持って来たのを確認して、健一は横断歩道に向かって走った。

「さくらお姉さーん！」

健一の声にさくらは顔を上げた。

「健一君、来てくれたの？」

「さくらお姉さん、この前は酷い事言ってごめんなさい」

「いいの。あたしも自分の事ばっかり考えてたんだって分かったから」

「じゃあ、仲直りしてくれる？」

「うん」

「良かった。最後にさくらお姉さんと仲直りできて」

「最後って？」

「陽太郎と直樹と花を持って来たんだ」

さくらは陽太郎と直樹が摘んで来た花を見て、目を大きく開けた。そして、その目から涙が溢れてきた。

「どうしたの、それ……？」

陽太郎が摘んで来た花を健一に１輪渡す。健一達は声を弾ませた。

「１０００輪目は絶対にこの花にしたかったんだ」

「さくらお姉さん、この花どこに咲いてるか知ってる？」

「３月とか４月じゃなくても咲くんだよ！」

さくらは健一達が１輪ずつ持っている花を見つめて、その花がどこに咲いているのかを一生懸命思い出した。

「……この近くの公園だよね？」
あの公園にはこの花が咲くんだった。
「この花の名前は分かるよね？」
健一達は満面の笑顔を浮かべている。
「もちろん分かるよ。だって、あたしの名前だもん」
さくらは健一達が持っている花瓶の花をゆっくりと見た。
「その花、桜。あの公園には年に2回咲く桜の木があった」
さくらは遠い目をして記憶を探る。
「さくらお姉さんは3月か4月に咲く桜のほうが良かった？」
健一が心配そうに聞いてきた。
「ううん。これが良かった。あたし、その桜が大好きだったの。この時期に咲く桜が1番大好きだったの……」
さくらは両手で顔を覆って泣いた。健一がさくらに話しかける。
「本当は枝ごと持って来たかったんだけど、桜って枝を折っちゃうとそこから傷付きやすくなるんだって。だから、花だけ持って来たんだけど、これでも1輪になる？」
「健一君、どうして桜の枝を折ると木が傷付きやすいって知ってるの？」
「僕、お小遣い貯めて花の図鑑を買ったんだ。その本に書いてあったんだよ。桜の中には年に2回咲くのもある事も知ったんだ。あの公園にその桜があって良かったよ」
直樹が納得した顔で言った。
「健一君、それでずっと放課後もすぐに帰ってたんだ」
「うん。2人と喧嘩しちゃったのもあるけど、家事をたくさんしたかったから」
「健一って意外とかっこづけだよな」
憎まれ口を叩く陽太郎も感心している様だった。そんな健一達のやり取りを聞いていたさくらが笑顔になるのを見て、3人は口を揃えて聞いた。
「桜の花でも3輪に入る？」

「あたしが3輪って認めれば3輪だよ」
さくらの目から、また涙が溢れた。3人はさくらに優しく声をかける。
「これで1000輪だね」
「さくらお姉さん、ここからいなくなるんだね」
「おれ、少し寂しいよ」
「あたしも寂しい。でもね、最期の意地でここに残ってて良かった。健一君と陽太郎君と直樹君に出会えて良かった。3人と色んな話ができて良かった。3人に色んな思い出を貰えて良かった。3人が最後にこの桜を供えてくれて、本当に良かった……」
さくらの声は完全に涙声になっていた。
「おれ、絶対にさくらお姉さんの事忘れないからさ、さくらお姉さんもおれの事忘れないでよ」
「うん」
「僕の事も忘れないでね」
「うん」
陽太郎と直樹の声も涙声になっていた。
「さくらお姉さん、この花瓶貰ってもいい？」
「こんな古い花瓶なのに？」
「うん。僕とさくらお姉さんが出会うきっかけになったものだから」

「じゃあ、貰ってくれる？」
「ありがとう、さくらお姉さん」
健一は泣かなかった。我慢するんだ。さくらお姉さんの泣き顔も笑顔も、しっかりと覚えておきたいもん。泣いたら、ぼやけちゃうから。

さくらの姿が事故に遭う前の姿すっとに戻った。
「あたし、元の姿に戻ってる」
さくら自身も健一達も驚いた。

「さくらお姉さん、やっぱり美人だ」
３人が同時に同じ事を言って、さくらはおどけて言う。
「こんな美人、滅多にお目にかかれないんだからね。３人共、よく覚えておく様に」
「忘れないよ、絶対」
また３人の声が重なる。
「やっぱり、君達３人のバランスって最高だよ」
さくらは夜空を見上げた。
「あたし、そろそろ行くね……」
この３人に見送られるあたしは、なんて幸せなんだろう。
「３人共、本当にありがとね」
「僕達もさくらお姉さんに出会えて嬉しかったよ。ありがとう」
少しの沈黙の後で、さくらの身体が宙に浮いた。さくらが手を振った。
「健一君、陽太郎君、直樹君、さよなら」
「さよなら、さくらお姉さん！」
健一達も精一杯手を振った。そして、さくらは笑顔で宙に消えて行った。
「さくらお姉さん、ちゃんと行けて良かったね」
「おれ、この桜の花、押し花にして大事にする」
「僕も、押し花にして、花瓶も大切にするよ」

健一は思った。さくらお姉さんと出会って過ごしたのはたったの３カ月。でも僕はこの３カ月の事を絶対に一生忘れない。陽太郎と直樹と前よりもずっと仲良くなれた事を。さくらお姉さんの綺麗な姿を声を泣き顔を笑顔を。

２０歳になった健一達は成人の祝いに集まった。３人共、大学は別々だったが友好は今も途絶えていない。きっと、さくらお姉さん

との出会いがなかったら、こんな風に集まらなかっただろうなと健一は思った。
「それじゃ、乾杯しようぜ」
「僕達の成人のお祝いに」
「さくらお姉さんの思い出に」
健一達はビールジョッキを掲げた。
「ありがとう」
健一にはさくらが笑顔で言っているであろう声が微かに聞こえた気がした。
さくらお姉さんのおかげで、僕には将来の夢が見つかったよ。僕、花屋になるからね。店にはもちろんあの花瓶を置くからね。さくらお姉さん、応援してくれるよね？

（後書き）

初めて書いた長編です。ｍｉｘｉで掲載していたら意外と好評でしたので、載せてみました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4246t/

花1000輪

2011年5月21日00時25分発行